

いきいきサロン

皆さんからの投稿でつくる、皆さんのページです

投稿募集中

お便り

還暦に隔世の感

仙台市若林区 関和幸 (68)

いきいきライフみやぎ

のことしの秋号の投稿ページに載った「エイジング」という題のお便りを拝読し、私も同感でした。ラジオから童謡「船頭さん」の「村の渡しのおじいさん」の歌詞が流れるのを聞き、60歳は現代の壮年期である、との内容でした。

最近、小津映画の名作「東京物語」と「晩春」を見る機会に恵まれました。前者は郷里の尾道から

子どもがいる東京へ旅行した老夫婦が帰郷し、東山千栄子演じる妻が夫を残して先立つが、この年齢が68歳。亡くなる年齢が早すぎるという設定ではありませんでした。

後者のラスト直前で、笠智衆演じる父親が嫁ぐ娘にしみじみ語る場面は56歳。こちらも余命が十分あるという設定ではありません。

プロレスラーのジャイアント馬場が還暦を迎えた時に「子どものころは60歳といえはおじいさんのイメージを持っていたが、いざ自身になってみるとそんな気はしない。まだ十分やれる」というような主旨の発言をしたのを思い出します。

よく言い表していると思うとともに、平均寿命が延びた現代では隔世の感があります。

現在、団塊の世代が65歳を迎え、ことし65歳以上の高齢者人口が3000万人を超え、全人口の24%を占めることになりました。平均寿命がさらに延びることが予測されますが、高齢期を心身とも健やかに過ごすよう、お互いに努力したいものです。

秋の気配に背中を押されて庭先に出てみると、素晴らしい青空が広がっていました。昨年は体調を崩し、3週間余りの入院生活を体験しました。ボタン、シャクヤクなどに施肥できず、10月中なら追肥してもいいかと思

い、久しぶりに土の感触を味わいました。年齢を重ねると、小さいことにも新しい発見があり、楽しみを感じます。若いころは歩くことも駆けることも全てが当たり前前と違っていま

した。今では小さな主婦業にしても満足感を覚え、感謝している自分がいま

富谷町 加川師亨 (77)



育兒から出発し、社会とつながりながら幾山河を乗り越え、戦時下の耐乏生活も体験しました。数えきれない方々と

の触れ合いは、一番の幸せな思い出です。

65歳の時「セカンドライフ 老人の主張」という番組に出演したことがあります。今、90歳を目前にしてそれを思う時、あのころはそれなりの主張と思ったのでしょうか。

超高齢の方がラジオなどで「一日一知などおっしゃっているのを聞きま

す。私は「これだけのかなあ」と反省することばかりです。

台本もなく過ごしてきた歳月だから、リラックスして楽しく生きよう

と自分に相談している、さよつこのごろです。

勉強自力、再就職で人間成長

仙台市泉区 星宮守 (79)

1934年1月、岩手の片田舎に生まれ、中学校を卒業するや家庭の事情で高校進学を断念。村

役場に吏員として勤めるも、このままでは「井の中の蛙大海を知らず」になつてしまつと思ひ、54年3月に役場を退職しま

した。55年1月には自衛隊に入り、その勤務の傍ら60年4月から札幌南高通信教育部で学び、6年間で卒業資格を得ました。

人前で話のできなかつた私が、在学中は通信教育部署の会長や生徒会長を務めました。このことが自力での学力向上に、また、再就職が人間

成長につながつたと思ひます。

動。87年4月からは地域の防犯協会会長として活動しました。いろいろと積み重ねた経験が役に立っています。今後も努力を続けたいと思ひま

す。

水は生命なりの軍務教育

大和町 大友正雄 (92)

私は1937年1月10日、仙台陸軍病院に入隊しました。そして、ナー

スの軍務教育を受けました。今は老人なので、ややくたびれつつありますが、健康に生きるための秘訣(ひけつ)があります。それは毎日、水をきちんと飲むことです。

朝の起きがけ、入浴前後、そして就寝前にも意識して水を飲みます。私は酒もたばこもやりませ

ん。唯一の好物は砂糖を入れたコーヒー。カロリーゼロの無味無臭のミネラルウォーターを毎日飲んでら、6年になりま

す。ダイエツトも兼ねて体調は、すこぶる良好。ストレスをためないことも大切です。

私は衛生下士官だったので、水の大切さがよく分かります。兵士は軍装の中に必ず水筒がありました。水を飲むことで寝

付きが良くなり、食欲も旺盛。毎日に張り合いのあることが何よりも楽しみです。これも仙台陸軍病院で教育を受けたおかげです。

作家デビューはスゴイ!

仙台市宮城野区 内海季子 (71)

超多忙な一さんから本

当に久しぶりに、ドライブに誘つてくださる電話がありました。行き先は松島。訳を聞いてビックリ！一さんの82歳にな

るお姉さまが初めて小説を書き、その中で松島のある小さな島が描かれていて、その島を確認するためのドライブだそつです。

ペンネームは藤田司。「海の彼方へ 夕日に赤い帆」のタイトルで文芸社から新刊として自費出版したとのこと。「すぐ読みたい」と言ったら、「まだ書店にはなく、注文での取り寄せ」との話。電話の後にチラシが送られてきたので早速注文しました。2週間ほどかかると言われました。

なので、まだ読んではいません。チラシには「真つ直ぐな心ゆえに傷つく、満ち潮に取り残された二人。美しい島をめぐるめく夜。三陸の海辺と東北地方の山河を舞台に繰り広げられる情と知の相克」と書かれています。

一さんが電話で「姉は大いに照れているけれど、私小説風とても爽やかな恋愛小説」と話されました。早く読んでみたい

です。

いきいきライフみやぎのことしの秋号に「年齢で夢を諦めない」と題し、三屋裕子さんの講演会リポートが掲載されていますが、まさに82歳で女

流作家デビューの一さんのお姉さまはスゴイ!

松島へのドライブは、あす。とても楽しみです。